

学校教育目標	夢と志をもち、主体的・協働的に学ぶ児童の育成 (考動能力・協働能力・挑戦)	経営理念	○将来、社会で活躍する人材を育成するために、児童に3つの資質・能力を育成する。<寺西小で育成を目指す資質・能力>～児童も 教職員も 学校も～ 1【考動能力】: 自分で考えて行動する児童 2【協働能力】: お互いのよさを認め合い協力する児童 3【挑戦】: 粘り強く挑戦し続ける児童
--------	--	------	--

評価計画					自己評価					学校運営協議会による評価	改善方針		
項目	重点	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目	目標値	達成値		達成度	評価	結果と課題の分析	評価	改善方針
							11月	2月					
確かな学力	1	個別最適な学びと協働的な学びを一体的にとらえた授業の実現 【考動能力】○ 【協働能力】○ 【挑戦】○	○協働的な学びを大切にしたい授業づくり	○2部会制による校内研究の推進と13本の研究授業の実施	・教職員の意識調査【「授業力が向上した」と回答した教職員の割合】	85%以上	88%	90%	105%	4	教職員の意識調査によると、約9割の教職員が授業力の向上を実感している。研究授業における参観者のアンケートを見ても、5つの評価項目全てにおいて平均値が3.0以上(4段階評価)であった。保護者アンケート「学校は分かりやすい授業づくりに努めている」について肯定的評価をした割合は98.8%おり、前期より1.7ポイント増えている。日々授業改善に取り組んでいることが授業力の向上につながっていると考えられる。協働的な学びを大切にしたい授業づくりに取り組んできたが、他者との協働を通して児童の考えが広がり深まったというところは多い。協働を通して考えをアップデートしているよう学びの質を高めていく必要がある。	A	○来年度は、帯タイムを設定し、基礎能力を養う。 ○協働的な学習を成立させるために、目指すべき姿や実務方法について、具体化していく。 ○授業改善に向けて、校内研修や自己研修を行う。
			○確かな学力の定着	○単元テスト、学力テストの目標の明確化と学力定着状況の分析と取組	・国語・算数単元テスト平均【正答率70%未満】	10%以下	国5.28 算7.3	5.41 算8.44	144%	4	授業改善や各学年での取組が国語科・算数科での確かな学力の定着につながっている。しかし、11月よりも国語科・算数科とも70%未満の児童の割合が増えている。これまでの取組に加えて、帯タイムの実施など学力定着のための新たな取組を行っていく必要がある。	A	○来年度は、帯タイムを設定し、基礎能力を養う。 ○学力調査の分析を行い、課題を明確にしながら取組を考える。 ○家庭学習について、学校の取組の方向性を提案する。
			○寺西「教えのスタイル」に基づいた学習規律の定着	・寺西「教えのスタイル」に基づいた学習規律の定着	・教職員による実態調査【学習規律が定着している児童の割合】	80%以上	91%	90.5%	113%	4	おおむね学習規律は、定着している。学年主任を中心に指導内容を確認し、どの学級でも同じ指導ができるようになった。その結果、時間を守ることを意識する児童が増えた。さらに、学習規律が定着するように、学級経営についての研修を行ったり相談できる時間を設定したりしていく必要がある。	A	○学習規律等をもう一度確認し、教職員が意識統一して取り組んでいく。 ○学年始まりの取組を大切にいく。
			○標準学力調査の平均正答率【昨年度の全国平均との差よりも数値を上げる】	・標準学力調査の平均正答率【昨年度の全国平均との差よりも数値を上げる】	2教科6学年で50%以上	—	国2/6 算4/6	100%	3	全ての学年で、国語科・算数科ともに全国平均を上回ることができた。算数科は、教科として研究したこともあり、6学年中4学年が昨年度よりも数値が伸びた。しかし、国語科は、算数科ほど伸びなかったという課題が残った。これまでの取組に加え、授業改善や帯タイムの活用、読書活動の推進など、新たな取組を行っていく必要がある。	A		
豊かな心	2	その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて行動する態度を育む 【考動能力】○ 【協働能力】○ 【挑戦】○	○学校・家庭・地域で気持ちのよいあいさつのできる児童の育成	○あいさつレベルの可視化	・児童生活アンケート【あいさつレベルの自己評価をしている児童の割合】	80%以上	55%	58%	73%	1	本校では、挨拶振り返りカードを活用して児童のあいさつの習慣化を可視化するとともに、児童会によるあいさつ運動や、「寺西5つの宝」を意識した取組を進めてきた。しかし、これらの取組を行っても、あいさつが十分にできない児童については改善が見られなかったという課題が残った。今後は、児童自身の取組だけでなく、教職員がより積極的に児童へあいさつの声かけ、「大人が先にあいさつする学校」という雰囲気づくりを進めていきながら考えていき、教職員が手本となることで、児童のあいさつ行動を促し、全校で自然にあいさつが交わされる文化を育てていきたい。	B	○学校では、まず教職員が率先して挨拶をする。 ○あいさつについて(あいさつの意味・効果・気持ち等)学年に応じて、子どもにも考える時間を設定する。 ○児童会を中心に、あいさつ運動に取り組む。
			○学校へ行くのが楽しいと思える児童の育成	○教職員が児童の良さを認める。	・児童生活アンケート【「学校へ行くのが楽しい」の項目に「3」以上との自己評価をしている児童の割合】	80%以上	87%	87%	108%	4	「学校が好き」と答える児童の割合が80%に設定していたが、今年度は前後期ともに7%と目標を上回る結果となった。この背景には、「ありがとうの目」の取組や、日々の教員による丁寧な声掛け、さらに児童自身にめあてを持たせながら学校生活を送らせていることが大きく影響していると考えられる。これらの取組が、児童が学校に安心感や満足感をもって生活することにつながったと捉えている。	A	○児童と教師・児童と児童との人間関係づくりを大切に、あいさつや「ありがとうの目」などを通じて、行う。 ○心のサポートやスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーとも連携しながら、児童の安心できる居場所づくりを行う。
健やかな体	3	健康の保持増進と体力の向上 【考動能力】○ 【協働能力】○ 【挑戦】○	○運動好きな児童を育てる	○運動の楽しさを実感させる取組の実施。	・児童アンケート【「運動が好き」と回答した児童の割合】	87%以上	87%	88%	102%	3	「運動が好き」と答えた児童が後期では88.4%で前期より増えている。「よくあてはまる」は前期よりポイントが下がっているが、良い点ではまっている。「休憩時間には外で遊んでいる」は前期に比べてポイントの伸びがある。担任も休憩時間に一緒に遊んでいたり、スポーツ委員会主催の今年度初めての取組の「逃走中」では学級担任もハンターになり、子供と一緒に走ったりしていた。児童委員会が活発に運動に取り組んでおり、前期は縄飛び大会、後期はドッジボール大会や逃走中などを行った。	B	○委員会中心の活動は継続していく。 ○校内で体育の研修を行うなど、児童が達成感を味わえる体育の授業のあり方を研修していく。 ○体力テストで課題となる領域について、来年度取組を考える。
			○体力の向上を図る	○体育科授業の質の向上。	・教職員アンケート【「本運動をする時間が授業時間の割以上である」と回答した割合】	90%以上	97%	100%	111%	3	体育用具の準備時間を減らし、授業時間に単元のねらいを達成できるよう時間割や、準備運動の工夫を行ってきた。体づくりの基本としてストレッチの専門の講師を招へいし、正しい姿勢や動作の方法を学び児童への指導の参考とした。	B	
信頼される学校	4	安心・安全な学校づくりを推進し、地域・保護者から信頼され期待される学校 決められた時間内で仕事をすすめる働き方を浸透させ、時間外在校時間等勤務削減に取り組む	○ICTを活用した積極的な学校情報の発信	○学校だよりやホームページで積極的に情報発信する。	・学校評価アンケート【「学校のことから前よりわかるようになった」と回答した保護者の割合】	80%以上	89%	88%	110%	4	目標値は超えているものの、前期に比べて、数値が下がっている。自由記述の中に、学校だよりをHPにアップするのが遅くなっていることもある。学校だよりの内容については、各学年の取組を掲載するようにしているが、学校の取組が分かるような内容の工夫が必要である。	A	○HPの更新を継続する。 ○学校だよりの内容を充実させる。
			○地域とともにある学校づくり	○地域・保護者と協働した取組を推進する。	・学校評価アンケート【「学校は地域・保護者とともに教育活動を行っている」と回答した保護者の割合】	90%以上	96%	94%	104%	3	地域とともに教育活動をしている点については、今年度地域の防災について4年生が取り上げ、総合的な学習の時間を行った。地域の取組がよく分り、子どもたちの防災意識も変わった。しかし、保護者とともに教育活動をしている点については、課題がある。どのような取組が、保護者とともに内容になるのか、考え直す必要がある。	A	○人材バンクの活用を継続していく。 ○総合的な学習の時間を中心に、年間学習内容の見直しを行う。
			○定時退庁推進日を設定し、教職員の業務改善を促進する意識向上を図る	○子供と向き合う時間の確保と時間外在校時間等勤務の削減	・教職員への意識調査【「子供と向き合う時間が確保されています」と回答した肯定的な回答をした教職員の割合】	85%以上	85%	86%	101%	3	目標値は達成できたものの、まだ十分とは言えない。仕事の偏りがあったり、主任などは学校や学年の仕事があったりして、肯定的には捉えることができていないと考えられる。	B	○学校の組織の見直しを行い、職務を遂行しやすいよう改善する。 ○目録の見直しを行い、時間の見直しを持つ。
		○業績評価書における、各教職員の取組を共有する。	・業績評価書に係る評価【達成平均度】	3.1以上	3	3.3	106%	4	授業準備や教材研究を学年部で行ったり、ICTを活用して連絡・報告を行ったりするなど、協働的に業務を推進することが増えた。	B			

※目標の精選と重点化を行い、重点の項に「1」「2」「3」で表示する。

■自己評価
 4...目標を上回って達成
 2...目標をやや下回って達成

3...目標どおりに達成
 1...目標をかなり下回って達成

■学校関係者評価 (学校運営協議会による評価)
 A...とても適切である
 B...概ね適切である
 C...あまり適切でない
 D...全く適切でない